



診療所へ続く廊下

地元のために 変わらない「生活」を守ることに 変わらな



長野市国保診療所長
今井隆二郎 医師

長野市戸隠は長野県の北西部、戸隠山の麓に位置する。平成17年1月旧戸隠村が長野市と合併、新たなスタートを切った。有名な戸隠そばやハワイスポットとしても人気の高い戸隠神社など、魅力の宝庫に恵まれた市内隠の観光エリアとして県内外から客足が絶えない。昨年3月には「妙高戸隠連山国立公園」が全国で記念日の国立公園として誕生し、さらに注目を集めている。

長野市国保診療所は昭和42年に開所。平成19年に戸隠支所内の現在の場所に移転した。周辺には保育園、小学校、中学校が集中する戸隠の中心的な場所だ。支所の入口からまっすぐ進むと右側に内科診療所、少し先の左側に診療所の入口がある。

待合室に入る。患者さんが思っている以上に時間を過ごしていた。移転して約10年の診療所はまだまだ立ってきれて、ピンク色の樫と木目が温もりを感じさせる。壁に貼られた絵は、どれも家に描かいて意味がある。机の上のリーフレットには「やま」と、紙粘土や厚紙で作られたかわいらしい入れ物に入っているのびのびが付いた。診療所内にはオガールややさしい音色が響いている。

診療所に 新しい先生がきた!

昨年4月、診療所にとっては20年ぶりにとある新しい先生がやってきた。地元戸隠出身の井藤二郎先生だ。若々しくさわやかな雰囲気、午前中の診療が終わってお疲れのころ、笑顔で取材に応じた。

中学まで戸隠の学校に通った先生は、大学卒業後に東京女子医科大学の大学院で動物学をした。その後、長野へ戻り平成19年からの約10年間を長野市十字病院で勤めた。専門は消化器内科だ。現在は長野市内の自宅から戸隠へ通っている。

「戸隠へ戻りたいという気持ちは、もう戸隠になる前から持っていたんです。地元に戻った経路を尋ねると、こんな答えが返ってきた。

先の実家の戸隠で昭和元年から続



待合室には患者さんがたくさん

都会の大病院では患者さんのさまざまな病気、より患者さんを近くに感じようになつたという。長井十字病院は市街地から少しはなれた、戸隠とどこの部外者の患者さんか。高齢の入院患者の病気の後にもある生活が見えてきたのだ。そこには病気のけがが治つたとしても後遺症や老老介護の問題でなかなか自宅へ帰れないという現実があった。自宅で過ごしたい患者さん、できるだけ自宅で見てほしい家族、お父さんの昔の姿を思い出した。「へき地を外れまわりながら、主に訪問をほとんどやっていきたい」と強

訪問診療を やっていきたい

2代にわたる戸隠の医師を支えたときた。幼い頃からお父さんの背中をみてきた先生は、いずれはお父さんのような医師になりたいとに思っていたと語る。「大病院や急診とかでバリバリやる」というものもあるけれど、僕の中では地域で働くのが医者、先生にとっては、ごく自然な流れだったようだ。

取材日は1月下旬、冬が深くていた長野市内では久しぶりに雪が降っていた。長野県自治会館から診療所までは車で20分ほどの道のりだが、会館前の国道406号を鬼屋方面へと進む。路肩に寄せられた雪雲らに道幅が狭くなった。駐車道は抜け、戸隠支所に到着する。駐車場には除雪した雪が山積みになっている。大きな除雪車が雪を寄せつけてトラックに乗せて片付けていた。

通院できなくなっても 見続ける

診療所の外来診療は午前中のみ、1日35人前後が来院する。この日は40人近く患者さんが来院し、診療は午後1時過ぎまで続いた。高齢の方が多い。聞いてみるとやはり70、80代を中心に、90を越えている方もいる。介助を必要とする方も一歩ずつ自分で診察室まで歩いて来たのが印象的だった。

月々、金額の半後は訪問診療をしている。外来診療も大事だが、それ以上は訪問診療。往々大切している先生は今、通院して来られない患者さんが増えてきている。来てくれなくなつたら他の病院へお願いするの、寂しい話だから」と続けた。

の距離があると診察室に貼られた大きな地図をさして説明する先生。訪問は日でも多くても軒数はたいたい。ベニスは月1回程度とのことだが、定期的に来られる先生の存在は、患者さんサポートする家族にとっても心の支えとなっているところだ。



点検用のベッドが並ぶ

患者さんの生活を守る

日曜の診療では患者さんの話を聞くことが多くなってきている。そこで、せっかくここまでお力添えしているさだ、せつかく診療所スタッフには、何かひとつでも気持ちをくわけてもらいたいという思いから、患者さんとの会話を大事にしている。取材の日も診療室からゆつと

先日は、こうしたお話をすることが一日がかりとなっている状況を改善していきたいと考えている。そして、昔のように「気にするところがない」といつまで診てもらえる場所「であったらいい」と思っている。同時に週休してきている地区を、これ以上回復してきている地区を、もあるという。同世代は戸隠を出て行った人もいたため、生活サイクルが変わってからも、また戻つていられるようなことになった。生活ややすく、活に満ちた場所を取り戻せたらうれしい」と話す。戸隠にとって大きな課題のひとつが見えた。最近では「元氣なお寄りが集まるような場所があったらいいね」とスタッフや支所の方との間で話題があがったことも覚えてくれた。



待合室の船は先生の子どもさんたちの作品



りととはつきりした口調で患者さんに話しかける先生の声が聞こえてきた。できるだけ理解しようとするうえで、資料を出したり絵を描いたりしながら説明することもあるようだ。戸隠の高齢者は農業の人が多いため、春から秋にかけての繁忙期には足腰や体の痛さを訴える患者さんも増える。しかし、農作業を休むわけにはいかないので、ゆつと体をゆるめることができない。先生は「お寄りが多いというのを押さえていた部分があったと現状がそう。」「ここには振り回る。」「先生は患者さんにとって病気を治すことも重要なが生活を守ることでも重要なイメージ」とその人の治療を進歩するために、病気の話題や診察室の空間だけでどうしても狭い範囲の情報になってしまっている。「医療費だけでは何もできない。病気を治すとか薬を連打だけではなく、生活を取り巻く介護、福祉スタッフとの連携が大事」と話している。いろいろな方面から情報をとらえつつも集めることが患者さんの生活維持のキズとなっていることを教えてくれた。

地域がつなぐ安心感

診療所のスタッフは先生の他に、看護婦さん、事務員さん、鬼屋里診療所とかけもの理学療法士が1人というメンバー。先生は「根底に『地元愛』がある」と誇らしく話してくれた。看護婦さん3人も戸隠の生まれで、2人が地元に住んでいるようだ。スタッフの中には20年以上も勤めている人もいて、カルテに書かれていない多くのことを知っているという安心感がある。スタッフからも「先生は地域の方にはよく親しまれている感じがして、ここから親しまれていることを活かしていかなくてはならない」と話も聞けた。患者さん、先生、スタッフが地元という共通点でつながり、お互いに安心感を持っていることが分かった。

続けて、地元で育ったお寄りさんが地元の国保の診療所であることは珍しいことで、戸隠は並んでいると話すスタッフ。「先生はお母様を大切に長く続けていてほしいなと思います」とメッセージを贈った。



丁寧に患者さんの話を聞く

診療所に集まるお寄りたち

戸隠の高齢化率は45.8%だ（平成29年1月1日現在）。65歳以上1,066人、総人口は3,638人で、10年前と比べてなんと1,000人以上も減っている。資料のぞきこんで、都部部ばかりではなくて戸隠のようなどころがモデル地区となつて問題点や対策を発信せよ」と話す。

戸隠は小学校・中学校・統合こども校つたになつてしまっている。種地区



スタッフの皆さん

診療室の前で待つ患者さん

目標は長く続けること

おわりにこれから抱負を質問したところ、「長く続けること」と「頼もしい人があつてきた。」「一貫し続けることを目標にしている。」「長く続けることと自然と安心につながる。このまま変わらなくていい」と思う。この展望をどうか生活できること、戸隠独自の医療を何かしらずすことができればいいと思

の先生の母校は現在戸隠地質化石博物館になっているそう。診療所周辺はまだいいが、そこから10分ほど離れている横地区の診療所はだいぶ進行していて、子どもほんの数人とか。

バスの運行本数も減つてしまったために、朝5時に起きてバスに乗ってくる人や、息子の通学途中に送つてもらう人もいる。そのため、朝の時間に患者さんが集中していき、多いときには20人くらいが開始時間の前に待っていることもある。また、婦人も正午過ぎのバスを逃す夕方になってしまったため、カルテには「バスの患者さん」と分かるようになっていて、できるだけ診察の順番を調整しているということだ。



内視鏡室

レントゲン室

う。その辺は長く続けていかなければいけないのかもしれない。」「愛おしいのが、医療に限らずすべての戸隠の能力なのかな。まだまだお寄り先生だが、これからますますと戸隠を見守り続けて、困った時には診療所の先生がいるという愛おしい安心感を人々の生活に届けたい。」「田舎に来る人も気持ちよく来たと言った先生、病院とはまた大変さがあるが「家族のサポートがあれば」と穏やかに表情をみせてくれた。ますます活躍に注目していきたい。また開ける日を愛しみにしたい。



スタッフが笑顔